

皮膚科疾患への漢方薬の応用

大阪警察病院 皮膚科 部長

羽白 誠 先生

1986年 大阪大学医学部 卒業
1991年 箕面市立病院皮膚科
1994年 関西労災病院皮膚科 医長
2001年 国立大阪病院皮膚科 部長
2004年 大阪警察病院皮膚科 部長
2008年 神戸女学院大学人間科学部
非常勤講師兼任



大阪の下町、天王寺区にある大阪警察病院は、もともとは警察関係者の福利厚生施設の一環として運営されていたが、現在では民間病院として地域医療に貢献している。同病院の皮膚科は、年間に延べ17,000人ももの外来患者の診療を行っているが、単に患者さんの皮膚のみならず、心理社会的背景を考慮したメンタルケアを合わせた診療を心掛けている。

今回は、大阪警察病院の皮膚科をたずね、日本皮膚科学会認定皮膚科専門医であると同時に日本心身医学会認定心身医療専門医・指導医でもある羽白誠先生にお話をうかがった。

皮膚科医さらには心身医学会の専門医・指導医として

私はもともと精神科にも興味があり、皮膚科医をしながら精神科の心理行動療法などの勉強会に参加していました。皮膚科の診療をしていて、難治性の蕁麻疹患者さんに少量の精神安定剤を処方すると、症状が著しく改善されることを経験しました。そのようなことがきっかけとなり、皮膚科の専門医としてだけでなく、心身医学についても研鑽を深め、現在では日本皮膚科学会認定皮膚科専門医だけでなく、日本心身医学会認定心身医療専門医・指導医としても認められるようになりました。

ところで、アトピー性皮膚炎や蕁麻疹などの皮膚疾患患者数は年々増加傾向にあり、かつ治療に難渋する症例が多くなってきていることは多くの皮膚科医が実感されているところではないでしょうか。ストレス過多社会の影響を受けていることも事実ですが、このような患者さんには単に皮膚の症状だけを診るのではなく、精神面を含めた全体的なアプローチが重要です。そのためには皮膚科医にも心身医学的な知識や経験が求められていると思います。

大阪警察病院皮膚科の特徴

そのような考え方から、心療内科的診療、アレルギー学的診療さらには内科的診療を含めた広範囲な診療というものを以前から心掛けています。

当院でも、心理社会的背景を考慮したメンタルケアを合わせた診療を行っています。対象疾患はアトピー性皮膚炎、慢性蕁麻疹、円形脱毛症、乾癬、帯状疱疹後神経痛、

皮膚感覚異常症、皮膚寄生虫妄想、限局性多汗症、抜毛癖などの皮膚科心身医学、薬疹、接触性皮膚炎、皮膚悪性・良性腫瘍、悪性リンパ腫、膠原病などのほか、過敏性腸症候群、摂食障害、不定愁訴などの心療内科的疾患も含まれており、皮膚科といえども広範囲です。これら疾患のなかでも特にストレスと関連が深い疾患では、精神的な薬物療法や精神療法を併用する治療法である「心身医学療法」が効果的であることを実証しています。

このような実績が評価され、当科は日本皮膚科学会認定研修施設であるだけでなく、日本心身医学会研修診療施設でもあり、この2つの学会の認定を同時に受けている研修施設は全国でも当科が唯一と自負しています。

当科の皮膚診療の実際

広範な皮膚疾患に対する治療の基本はあくまで西洋医学に基づく治療です。しかし、実際には西洋医学的治療だけでは、増悪を繰り返したり、受診のたびに症状が大きく変化したりするなど、治療に難渋するケースも少なくありません。

それに対し、たとえばストレス性の因子が強いアトピー性皮膚炎では、主にステロイド外用や免疫抑制剤外用を中心とした皮膚科的な治療に加えて、心身医学療法を併用し、また、慢性蕁麻疹でも抗アレルギー薬の内服だけでは効果が不十分でストレスの関与が考えられる場合には、心身医学療法を併用することで治療効果が高くなります。

とくにアトピー性皮膚炎などではストレスの関与が強いものがかなりの比率で含まれており、心身症の病態を呈するものが多く見られます。そこで診療にあたって



は、必ずしも心身症の専門家でなくても比較的簡単に心身症の病態を診断・評価する方法が必要と考え、われわれはアトピー性皮膚炎に特異的な心身症の病態を反映した評価ツールを開発しました。

これは「アトピー性皮膚炎心身症尺度」(psychosomatic scale for atopic dermatitis ; PSS-AD)と呼ばれるもので、12の質問から構成されています。専門的な知識がなくてもアトピー性皮膚炎の心身症の病態を評価することができます。5点(非常にあてはまる)から0点(まったくあてはまらない)で集計し、合計点数が28点以上(満点は60点)ならば心身症と診断することが可能です(表1)。

表1 アトピー性皮膚炎心身症尺度(PSS-AD)

PSS-AD改訂版		次の質問を読んで、現在から過去1ヵ月間を振り返ってあなたの状態にもっともよくあてはまると思われる答の番号をひとつ選び○をつけてください				
	まったくあてはまらない	あてはまらない	あまりあてはまらない	ややあてはまる	あてはまる	非常にあてはまる
1. ストレスがあるとアトピーがひどくなる	0	1	2	3	4	5
2. アトピーのために何をしてもめんどろになる	0	1	2	3	4	5
3. きちんと治療しているのに、どうしてよくなるかわからない	0	1	2	3	4	5
4. 怒りを感じはじめると痒みが強くなる	0	1	2	3	4	5
5. アトピーがあるために、人間関係が余計に難しくなっている	0	1	2	3	4	5
6. なぜアトピーの症状がひどくなるのか説明がつかない	0	1	2	3	4	5
7. イライラや不安を紛らすために皮膚を掻く	0	1	2	3	4	5
8. なぜ私だけがアトピーでこんなに苦勞しなければならないのだろうと思う	0	1	2	3	4	5
9. くやしいことや腹が立つこと、悲しいことを我慢していると痒みが起こる	0	1	2	3	4	5
10. アトピーがよくなるまで自分は何もできないとあきらめている	0	1	2	3	4	5
11. 医者の指示どおりやってきたのによくなる	0	1	2	3	4	5
12. アトピーのため、人の視線が気になる	0	1	2	3	4	5

©2005 by Tetsuya Ando All rights reserved.
羽白誠ほか：「アトピー性皮膚炎」心身症診断・治療ガイドライン2006(協和企画)より

PSS-ADで心身症と診断された場合には、まず、できるだけ病歴を詳しく聞き、患者さんの不安や不満に耳を傾けることが大切です。また、薬物治療でも皮膚科疾患の治療薬だけではなく、抗うつ薬や抗不安薬が必要な場合もあります。これらの治療も皮膚科が責任を持つて行うことで、患者さんにとっては皮膚疾患と心の問題を同時に診療してもらえるために安心感が強くなり、そのことがさらに治療効果を高めることにもつながります。

心身医学療法における漢方薬

心身医学というのは、文字通り「心」と「身」の両方を診る医学です。単に皮膚症状だけを診て、薬物治療をするのではなく、その患者さんの日常生活や心の問題についても目をむけ心身の両方を改善することを目標とします。

そのためには心理療法や向精神薬なども取り入れます。また、薬も西洋薬だけではなく、漢方薬も使用可能

です。とくに漢方薬の選択にあたっては、「身」だけではなく「心」の部分も含めて「証」を判断しますから、漢方薬を上手く使用することは、心身医学の考え方と共通する部分が多いと思います。

皮膚疾患治療に使用する主な漢方薬

アトピー性皮膚炎でも蕁麻疹でも、基本は西洋薬で、漢方薬はあくまで補完的な使い方であるべきと考えています。そのような考え方で、当科では主に十味敗毒湯、補中益気湯、加味逍遙散をよく使用しています。これらの漢方薬は、皮膚疾患の種類、つまり病名にこだわるのではなく、あくまで患者さんの「証」をもとに使用しています。ただ、脈診や舌診までは診ておらず表2に示すような基準で選択しています。

患者さんは、漢方薬の服薬についても特に抵抗感はなく、むしろこれまでの西洋薬だけの治療でうまくいかなかった方が多いだけに、漢方薬に対する期待は大きなものがあります。しかし、これまでにそのようなエビデンスが必ずしも十分でなかったため、われわれは現在、当地区の多施設でアトピー性皮膚炎患者を対象に、西洋医学的治療に十味敗毒湯を併用した場合の臨床効果の検討を始めています。今後、多くの施設で、同様の試みがなされ、より多くのエビデンスが重ねられることを望みます。

われわれは現在、当地区の多施設でアトピー性皮膚炎患者を対象に、西洋医学的治療に十味敗毒湯を併用した場合の臨床効果の検討を始めています。今後、多くの施設で、同様の試みがなされ、より多くのエビデンスが重ねられることを望みます。

表2 皮膚科疾患に使用する主な漢方薬の使い分けの目安

	使い分けの目安
十味敗毒湯	<ul style="list-style-type: none"> 基本的には化膿性の皮膚炎の患者 しかし化膿してなくても炎症所見の強い場合(たとえば、紅斑や丘疹の多い患者)
補中益気湯	<ul style="list-style-type: none"> 自律神経失調や消化器機能に障害のある場合 炎症所見のある場合 不定愁訴の多い場合(たとえば、アトピー性皮膚炎で胃が虚弱な患者)
加味逍遙散	<ul style="list-style-type: none"> 精神的に不安定 血のめぐりが悪く冷えを伴う場合(瘀血所見) むくみを伴う場合(たとえば、アトピー性皮膚炎で手足が冷える患者)